その夜の羊飼いたち

ルカによる福音書　２：８－１６

司祭　ヨハネ 井田　泉

2023 年 12 月 22 日

大阪保育福祉専門学校にて

今日は、遠い昔の出来事を心に思い浮かべてみましょう。およそ 2000 年前、ユダヤのベツレヘムの野原です。羊が眠っています。

羊は自分たちだけでは生きていけません。羊飼いがいなければバラバラになってしまう。迷子になって谷に落ちるかもしれません。狼に襲われて食われてしまうかもしれません。羊飼いたちが守っています。

以前に、ある親しい人から、パレスチナの羊飼いのテントに泊めてもらった話を聞いたことがあります。夜が明けると、羊飼いが羊を集めます。すぐに集まるのもいれば遊んでいてなかなか集まらない羊もいる。羊飼いは羊にそれぞれ名前を付けていて、100 匹いても全部 1 匹ずつ見分けることができるのだそうです。羊の名前を呼んで集める。みな集まると、羊飼いが先頭に立って進んで行く。羊はそれに付いていく。羊飼いは杖を持っていて、その杖で羊を導く。水のあるところ、草のあるところに連れて行く。羊飼いが羊を守り導いて行かなければ、羊は生きていけない――そんな話でした。

このような大切な、また大変な仕事をしているのが羊飼いなのですが、当時、羊飼いたちは町の偉い人たちや金持ちたちか

らは軽蔑の目で見られていました。けれども羊と羊飼いたちがいなければ町の人の暮らしは成り立ちません。羊の毛を刈る。ウールです。毛糸、毛織物になります。人を温かく包みます。羊の乳から乳製品、チーズが作られ、人の命を支えます。

大切な羊たちを守っているのが羊飼いですが、彼らにも苦労があり、大きな困難を抱えることがあります。長く雨が降らなければ水は涸れ、羊の餌である草がなくなります。水と草のある所を的確に探して、羊の群れを連れて行かなければなりません。判断を誤れば大量の羊を死なせることになり、自分の命にも危険が迫ります。狼が来れば杖で追い払わなければならず、盗賊が集団で襲ってくれば命がけで戦わなければなりません。戦争に巻き込まれたら、どんなひどいことが起こるでしょうか。

危険と困難を抱えている羊飼いたちが、ずっと頼りにしてきたものがあります。それはもう500年も1000年も、もっと前からそうなのです。それは祈りです。祈りをとおして呼びかける神さまです。聖書をとおして語りかけてくださる神さまです。自分たちは羊飼いなのですが、言わば自分たちも守られなければならない羊です。神さまが自分たちを守ってくださる羊飼いなのです。そう信じて祈って生きてきました。

昔から語り伝えられてきた神さまからの約束があります。

「ベツレヘムよ、お前の中から、わたしのためにイスラエルを治める者が出る。彼は立って、群れを養う。彼こそ、まさしく平和である。」旧約聖書・ミカ書 5:1、3、4

その方がまことの羊飼いとして来てくださる。その方を、彼らはずっと祈りつつ待っていました。

ここはユダヤのベツレヘムの野原です。夜が更けていきます。暗い中、天には星がまたたいています。寒い夜です。羊飼いたちが羊の群れを見守って番をしています。

突然、光が輝いてあたりが明るくなり、天使が現れました。羊飼いたちは恐れました。

天使は言いました。

「恐れるな。わたしは大きな喜びの知らせをあなたがたに持って来た。今日ダビデの町、ベツレヘムにあなたがたのために救い主がお生まれになった。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるだろう。」

すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言いました。

「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、み心に

適う人にあれ」ルカ 2:8-14

ふと気づくと、元の静かな夜の野原でした。あまりに不思議な出来事でした。今のことは現実なのか。けれども羊飼いたちの胸に、何か温かい、うれしい不思議な気持ちが宿っています。お互いに言いました。

「さあ、ベツレヘムへ行こう。神さまが知らせてくださったその出来事を見ようではないか」ルカ 2:15

何か引きつけられる気がして、見たい、確かめたいという思いが高まって、羊飼いたちは出かけて行きました。

そして急いで行って、ある家の飼い葉桶の中に寝かせられている乳飲み子を見つけました。マリアとヨセフが傍らにいました。

羊飼いたちは見つめます。なぜか、この寝かせられている幼子から温かな光を感じるのです。幼子のそばにいると、深い安心と喜びがある。慰めと励まし、生きる力が与えられるのを感じます。大人が守ってやらねばならないはずのこの幼子が、なぜか自分たちを守ってくれているように感じるのです。今も苦労があり、将来の不安もある。けれども大丈夫。この方がおられるから。そう思えます。

羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことをそこにいる人々に話しました。聞いた人たちはそれを非常に不思議に思いました。

羊飼いたち自身も不思議でした。それでも彼らははっきりと分かった、感じたのです。この幼子が、神から来てくださった方だ、わたしたちのほんとうの羊飼いとなってくださる方だと。

この幼子イエスが成長して、人々の間で活動されるようになったとき、イエスはご自分のことをこう言われました。

「わたしは来た。羊が命を得るために、しかも豊かに得るために、わたしは来た。わたしは良い羊飼いである。」

ヨハネ 10:10-11

羊とは人々のこと、つまりわたしたちのことです。あのベツレヘムの羊飼いたちが見つけたのは、この方だったのです。羊飼いたちは幼子を探して見つけたのですが、実はイエスのほうが羊飼いとなって、わたしたちを見つけるために来られたのです。これがクリスマスの出来事です。

わたしたちはいろんな困難を抱えています。課題があり、悩みがあります。けれどもこのわたしたちを目指してイエスは来られた。わたしたちを生かすために、命を与えるために来られ

た。わたしたちを見放さずに、一緒にいようとして来られた。わたしたちを守るためには、自ら傷つくこともいとわれない方です。

皆さんは将来、子どもたちに、幼い者に関わられるでしょう。困難を抱えた人たちを支える働きをされるでしょう。幼い者となってこられたイエスは、皆さんの味方です。皆さんの存在と働きを支え、力となってくださる方です。

あの夜の羊飼いたちが見出した幼子イエスを、わたしたちも見出すことができますように。羊飼いたちに与えられた喜びと平和が、わたしたちにも与えられますように。救い主イエスが今もこれからも、いつも一緒にいてくださいますように。